

## 2 別府での思い出

坂下 彰

旧制富山高校の博物学教室で助手の仕事をしていた栄作は結婚して私が生れると、まもなく、大分県別府市にある別府中学(旧制)に赴任した。博物学教室の植木教授のお世話によってである。昭和10年のことだった。北陸と気候風土の全く異なる九州の地は、若い父にとって研究対象物の豊富さもあって、またとない好適の地であった。生徒たちは、栄作の言葉やなまりがおかしくてアダナ「越中」をつけた。しかし文検で教員資格をとったせいもあってか、教え方が緻密で熱心であったので一目置いていた。父は家庭のことは全くといっていいほど顧みなかった。引っ込み思案の母はまるっきり知り合いもない、言葉も通じにくい異郷の地に来て私という幼児を抱えて途方にくれてさみしがっていた。一生を別府で過ごしたかった父が昭和17年には富山県へ帰らざるを得なかったのもそのせいであった。でも別府では私はときどき野外へ連れていってもらった。田圃のなかのぬかるみでザリガニが鮮やかな赤いさみを蓮の葉の陰からかいま見せたり、落葉の積もった溪流をそと覗くと魚の尻尾がゆらゆらとかいま見えたり、枯れ枝が交錯した腐葉土の間からぶっくりとした白いキノコが顔を覗かせていたり、それらを胸を弾ませながら窺った思い出がいまも脳裏をよぎる。父は休日にはいつも野外へ調査にでかけた。湧出する温泉のかず2000か所をかぞえ、そこに生活する細菌類、藍藻類、貝類、昆虫類、魚類、手当たりしだいに調べた。やがて誰かの口ききがあったのだろうNHK熊本中央放送局より「温泉とそのなかで生活している生物」と題して本人の喋りによる放送が行われた。昭和14年3月29日6時25分～6時55分のことだった。放送原稿の抜粋——昆虫類には、ミヅカマキリ、アメンボ、コオヒムシ、ガムシ、ゲンゴロウ、カゲロウ、温泉蠅等の幼虫も52～53度迄の温泉に住んでいますが温泉に特有のものでなく冷水にも居るものです。しかし扇山山麓の溪谷から出るpH3、8という強酸性の硫黄明ばん泉にも生活している事はちょっと注目を引きます。次は魚ですが由布院の金鱗湖やこれと交通している温かい小川、光永地獄、亀川等にはコイ、フナ、メダカ、ドゼウ、オヒカワ、チチブなどは私達が入ったら気持が良いだろうと思われるような40度内外の温泉中に生活しています。昨年の夏光永地獄で釣りをやってみましたところ水表面で48度もあるところからフナが釣れました。こんな高温の所に生活しているのは川と連続しているから段々温度に慣れてきたためでしょう。最後に一言述べます。熱帯の淡水魚を飼育繁殖させたい事です。これらは色彩が鮮美で模様が端麗であり、形が清酒で見るからに快感を与え動的の美と静的の美を兼ね備え求愛の挙動・産卵・育児などにも奇妙な習性があるので鑑賞魚として満点の価値があります。

当時における別府の思い出はつきません。

## 研究発表

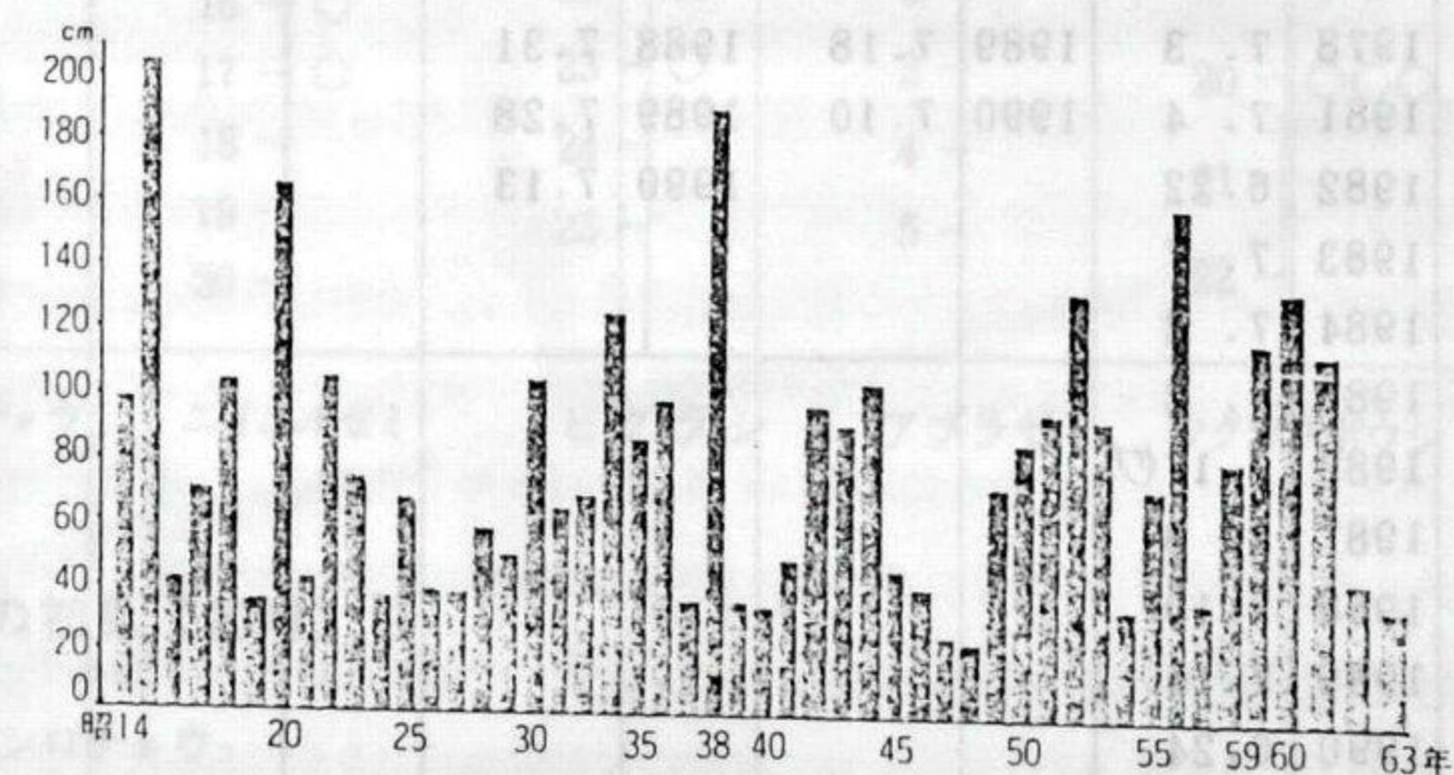
### 数種昆虫の初見・初鳴日

田中 忠次

筆者は折にふれて生物の初見日または初鳴日を記録している。そのうち記録数の多い昆虫6種について記してみたい。

昆虫の出現は気象に関係することが多い。特に春出現するものは冬の気象、出現時の気象に大きく左右される。雪が少なく暖冬といわれながら、冬の終り頃に積雪があり、残雪が長く続いた年や出現時期に寒気が続いたり、雨が続きたりすると出現が遅れる。したがってその年その年の気象と照合しながら出現日に考察を加える必要がある。しかし筆者には気象に関するデータの持ち合わせがなく、そのことにふれることがほとんどできない。ここでは主として観察した年の初見日や初鳴日をあげるにとどめる。ただし筆者の観察に見落としや鳴き声の聞きもらしがあるであろうし、先にあげたように昆虫自体の気象による出現時にずれがあること故、出現日の記録に正確さの欠ける点のあることはいめない。

参考までに考察の一助にもと富山県統計課(1989)の「富山がわかる本」の中にある最深積雪の年別変化の図を掲げることにする。



最深積雪の年別変化(富山がわかる本より)



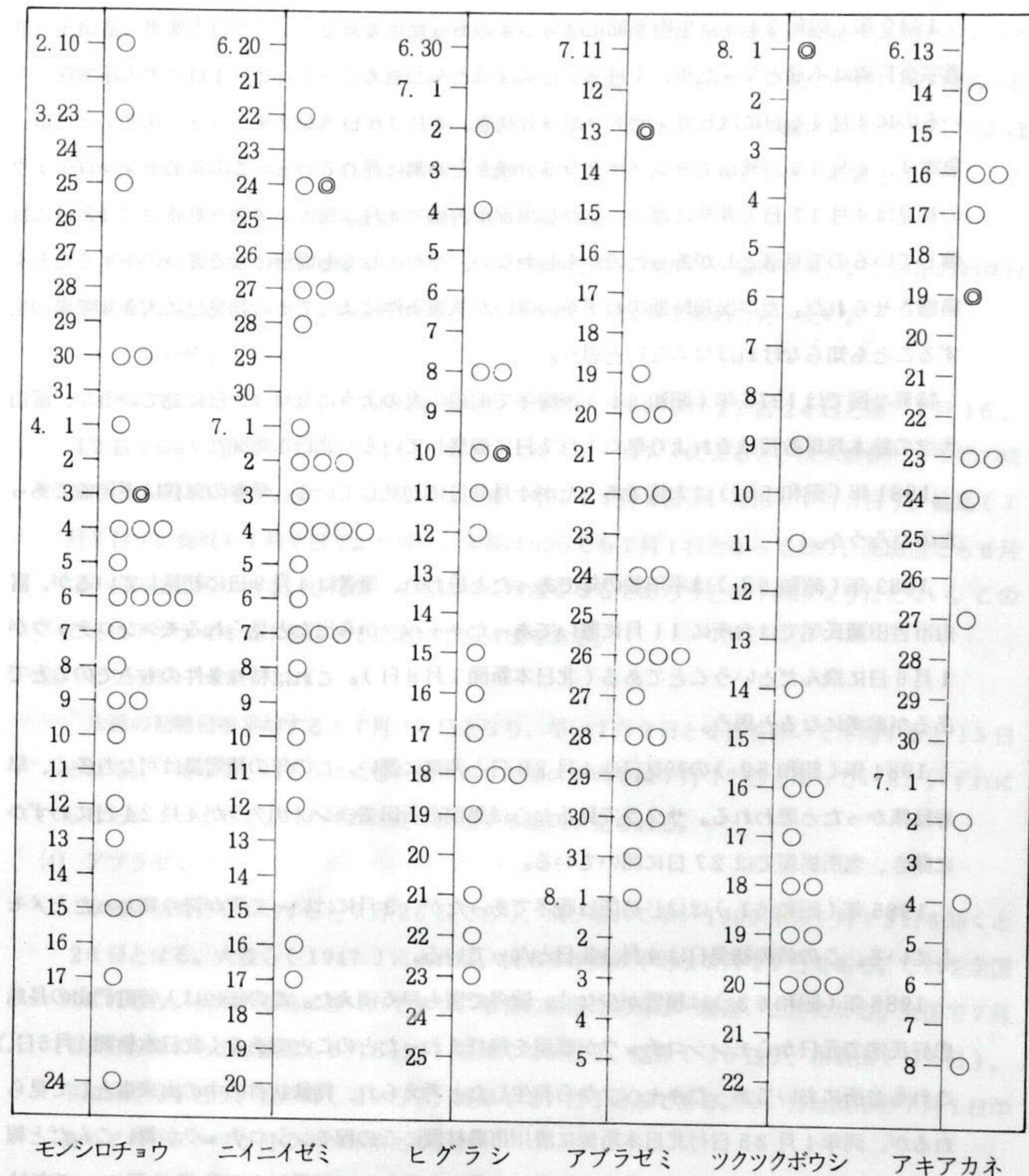
1. 初見・初鳴日一覧

観察年における初見または初鳴日は別表のとおりである。ただし条件を同一にするため筆者の居住地(宇奈月町柝屋)に限定し、やむを得ない場合のみ近隣の浦山、若栗のものを加えることにした。なおこの表をもとにより見やすくするため別図を作成した。

初見・初鳴日一覧(ウは浦山、ワは若栗)

モンシロチョウ		ニイニゼミ		ヒグラシ		アブラゼミ		ツクツクボウシ		アキアカネ	
年	月日	年	月日	年	月日	年	月日	年	月日	年	月日
1943	4. 6	1940	7. 7	1946	7. 2	1940	7.30	1946	8.18	1946	6.16
1947	4.15	1941	7. 1	1947	7.23(ウ)	1942	7.20	1948	8.18	1948	6.16
1948	3.30	1942	7.12	1948	7. 8(ウ)	1946	7.24	1949	8.19	1976	7. 2
1949	4.17	1943	6.28	1949	7.18(ウ)	1947	7.28(ウ)	1950	8.19(ウ)	1978	6.23
1950	4.12(ウ)	1946	6.24	1950	7.12(ウ)	1948	7.19(ウ)	1955	8.16	1981	6.24
1951	4.10	1947	7. 7	1951	7.17	1949	7.29	1981	8.16	1982	6.14
1952	4. 6	1948	6.27	1959	7.11	1950	7.26	1982	8.20	1983	6.23
1953	4. 5	1949	7.11	1976	7.10	1951	7.22(ウ)	1984	8.14	1984	6.27
1954	3.23	1950	7. 5	1977	7. 4	1975	7.26	1985	8.20	1985	6.17
1955	4. 8	1951	6.27	1981	7.16	1977	7.24	1986	8.17	1988	7. 8
1956	4. 6	1953	7. 4	1982	7.21	1981	7.26	1987	8.11	1989	7. 4
1959	4. 4	1955	6.26	1983	7.19	1982	7.20	1988	8.20	1990	6.19
1975	4. 6	1954	7. 4	1985	7.15	1983	7.27	1989	8. 9		
1977	4. 4	1971	7. 2	1986	7.22	1984	7.30	1990	8. 1		
1978	3.25	1976	7. 6	1987	7. 8	1986	8. 1				
1979	2.10	1977	7. 4	1988	7.18	1987	7.22				
1980	4. 4	1978	7. 3	1989	7.18	1988	7.31				
1981	4. 9	1981	7. 4	1990	7.10	1989	7.28				
1982	4. 1	1982	6.22			1990	7.13				
1983	4. 9	1983	7. 7								
1984	4.24	1984	7. 2								
1985	4. 7	1985	7. 2								
1986	4.13	1986	7.17(ウ)								
1987	4. 3	1987	7. 8								
1988	4.15	1988	7.10								
1989	3.30	1989	7.16								
1990	4. 3	1990	6.24								

初見・初鳴日一覧図(◎は1990年のもの。)



2. 各種の初見(初鳴)日

(1) モンシロチョウ

異常発生と思われる1979年の2月10日を除いて相加平均すると4月7日となり、遅すぎる1984年の4月24日も除けば4月6日となる。ちなみに大後美保ら(1947)によれば、伏木測



候所の13年間の平均初見日は4月7日となっている。

1949年(昭和24)は生物季節にばらつきのあった年である。1月5日大吹雪で富山地方鉄道宇奈月線は不通となったが、1月25日にはほとんど消えている。2月4日にナの花が咲いているのに4月14日にはヒガンザクラが9分咲き、4月16日ヨシノザクラ9分咲き(三日市、魚津)、4月19日浦山でヨシノザクラ9分咲きと非常に遅れている。この年のモンシロチョウの初見は4月17日で非常に遅い。しかし黒部市舌山で4月3日に、宇奈月町浦山で13日に目撃しているので見落としがあったのかもしれない。それにしても場所による違いの生ずることを痛感させられた。だが出現時期のわずかの違いが気象条件によってその初見日に大きな差異の生ずることも知らなければならないと思う。

特異な例では1979年(昭和54)が暖冬で前掲の表のように2月10日に見ているが、富山大学の鈴木邦雄教授はそれより早く1月7日に観察している(北日本新聞社)。

1981年(昭和56)は大雪であったが4月9日に初見している。早春の気候は平年並であったのだろうか。

1983年(昭和58)は平年並の年であったと思われ、筆者は4月9日に初見しているが、富山市吉田薫氏宅では台所に11月に置いてあったキャベツから出たと見られるモンシロチョウが1月6日に飛んだということである(北日本新聞1月8日)。これは特殊条件のもとでのことであるが参考になると思う。

1984年(昭和59)の初見日は4月28日と非常に遅い。この年の積雪量は可なり多く、早春は寒かったと思われる。サクラで見ると黒部市石田でヨシノザクラが4月24日にわずかに開き、当所栃屋では27日に開いている。

1986年(昭和61)ははじめ頃は暖冬であったが、3月にはいって雪が降り寒かったとメモしている。この時の初見日は4月13日となっている。

1988年(昭和63)は積雪が少なく、暖冬で雪も早く消えた。この年には入善町門山の長島忠好氏宅で元日からモンシロチョウが部屋を飛びまわったとのことである(北日本新聞1月5日。)これも台所においてあったキャベツから発生したと考えられ、特殊条件の中の出来事として見られるが、同年1月25日付北日本新聞に滑川市農林課にこの程モンシロチョウが舞いこんだと報じている(写真は♀)、しかし筆者の初見は4月15日となって平年より非常に遅い。これは見落としがあったかもしれないが、筆者のメモには暖冬であったが3月になって寒い日が多く、サクラなどの開花も遅れたと記している。そのことから早春の気候に影響されたものと思う。

1989(昭和64)も暖冬で、モンシロチョウの初見は3月30日で早い方である。この年の2月9日付北日本新聞は大沢野町上大久保栗原剛氏宅の茶の間でアゲハチョウが羽化したことを

報じている。これも自宅に取り込んだミカンから出たものと考えられている。特殊条件のもとであるが参考になろう。また新湊市海老江鎌合五十嵐弘一氏が自宅の庭木に体長2cm程のチョウを見つけたとのことである(1月4日付北日本新聞風車欄)。これには写真が出ているが種名はわからない。ガのような感じもする。中川秀幸氏もガの可能性があると同欄に述べている。そのほか氷見市灘浦丘陵地に菜の花が1月も早く咲いたと報じられている(北日本新聞2月9日)。とにかくこの年は真冬も早春も比較的暖かったためと思われる。

1990年(平成2年)も暖冬で早く出現した動物、早く開花した植物も多い。この年の初見日は特別早いこともないが4月3日である。この年のことは項を改めて述べたい。

#### (2) ニイニイゼミ

本種の初鳴日を平均すると7月4日となり飛び離れて早い6月22日24日と遅い7月16、17日を除いて計算しても7月4日となる。大後ら(1947)によると、伏木測候所8年間の統計では7月10日となっている。これは近隣の相川(7月5日)、高田(7月5日)、輪島(7月7日)、金沢(7月7日)より遅い。本種は山形でも7月1日となっており、北海道でも6月30日のところがある。したがって北に行く程遅くなるであろうとの予測はなりたない。このことはアブラゼミ以下他のセミにおいても同様である。

#### (3) ヒグラシ

本種の初鳴日を平均すると7月14日となり、早い7月2日と4日を除いて平均すると15日となる。大後ら(1947)によると伏木の9年間の平均では7月17日となっている。いずれにしてもニイニイゼミよりわずかに遅く出現する傾向が見られる。

#### (4) アブラゼミ

本種の初鳴日を平均すると7月25日であり、飛び離れて早い1990年の7月13日を除くと26日となる。大後ら(1947)によれば、伏木9年間の平均は7月21日である。これを全国的にみると、伏木の初鳴は遅い方であり、筆者の栃屋の初鳴は一層遅いことになる。全国で7月26日以降のものは函館(8月8日)、盛岡(28日)、檀原(30日)、和歌山(29日)、宇和島(26日)、室戸岬(29日)、厳原(27日)のみである。早い方は浜田の7月1日があり7月10~20日の所が非常に多い。

#### (5) ツクツクボウシ

本種の初鳴日を平均すると8月16日、特別飛び離れて早い1990年の8月1日を除くと17日となる。大後ら(1947)によれば伏木9年間の平均は8月6日である。本種は他のセミと違って、伏木と栃屋では10~11日もの差がある。全国的に遅い場所を拾ってみると、館野(21日)、三島(21日)、銚子(18日)、横浜(18日)、御前崎(18日)、名古屋(18日)、



徳島(24日)、宮崎(20日)、鹿児島(19日)があるのみで、8月10日前後が多く、7月に初鳴の聞かれた所が10箇所もある。

(6) アキアカネ

本種の初見日は12回観察しているが、非常にばらつきが多い。平均すると6月23~24日となる。大後ら(1947)にはトンボ全体として記載され、アキアカネ単独のものはない。したがって他と比較することはここでは不可能である。ただ本種の初発は目立たないため見落としていた可能性があり、6月20日頃が普通なのではなかろうか。

3. 1990年(平成2)の初見・初鳴

この年は前年の12月から暖冬で、年間を通じて高温の年であった。12月28日付北日本新聞天地人欄につきのようなことが記されている。

「今年の日本は高温続き、富山でも2月以降はいずれも高く、年間平均気温は15.1度と観測史上最高値となった。平年より1.4度も上回る。全国でも8割の气象台が記録を更新。おかげで各地からサクラ、サツキ、ヤマブキなど時ならぬ花だよりが寄せられている」と。筆者もサクラその他で早い例を観察している。新聞でも普通4月上中旬から出現するギフチョウが、酒井秀紀、荒川良氏などにより3月21日八尾町と山田村の山林で採集されたことを報じている(北日本新聞3月23日)。また6月下旬から発生し7月中旬が最盛期になるゲンジボタルが6月8日付北日本新聞に城端町大窪地区で乱舞がはじまっていると報じている。これらのほか例年より早いという情報をいくつも聞かされている。

今回取りあげた6種の昆虫も早い出現を示している。特にニイニゼミは全初鳴日の2番目、アブラゼミ、ツクツクボウシは飛び離れて1番目、アキアカネの初見は4番目となっている。これらは今年の高温による影響なのであろうか。

引用文献

1. 大後美保・鈴木雄次(1947):日本生物季節論、北隆館(東京)、217PP.
2. 富山県統計課(1989):富山がわかる本、富山県統計協会(富山)、244PP.

イ ラ ガ

田中忠次

富山県にはイラガ科の蛾は10種知られているが、もっとも普通でもっともよく知られているのがイラガである。本種は開張33mm内外、頭胸部及び前翅は黄色、前翅の外半は褐色を帯び、翅頂から褐色の2線が走る。後翅は淡褐色である。

幼虫は肉突起に刺毛を持ち、見るからに怖そうな体をしている。これにさわると激しい疼痛をおぼえる。冬越しは幼虫体で固い繭の中で行う。宇奈月町の朽屋など一部ではオコジョと呼んでいるが、県内の多くの場所ではシナンタロウと呼んでいる。カキやモミジなど種々の広葉樹の葉を食べる。

戦後農薬散布が行われてから一時非常に少なくなっていた。かつて筆者が広島大学の中川逢吉氏(故人)から昆虫の冬越しについて依頼され、写真撮影のため繭を探したがなかなか見つからず困ったことがある。富山県昆虫研究会(1979)の記載を見ても1973年鐘釣で2♂が記録されているのみである。

1981年県道黒部宇奈月線の一部で拡巾工事が行われ、それに伴い自宅に植えておいたシラカバを切らなければならないことになった。その折、切り落とした枝の葉に思いもよらないムラサキイラガの幼虫が多数いるのに驚いた。またモミジの葉にいることも知った。しかし翌年からは注意しなかったこともあって本種の幼虫を見かけていなかった。ところが1990年再びカキとコマユミの葉土に数頭の幼虫のいることを知った。今後も当地に本種を見ることであろう。

さて上記のムラサキイラガの幼虫が見られた頃からイラガ(?)に刺されることが多くなった。しかしその頃はまだイラガが少なく、多くはクロシタアオイラガの幼虫で特にウメに多く見られ、ハナズボウその他の植物にもかなりの個体が見られた。本種は山地や山間地で灯火採集をするとよく飛来するが、平地での採集記録のなかった種である。1987年本種幼虫の多かったウメが枯死し、そのためか現在はほとんど見つからない。

イラガ幼虫が多く見られるようになったのは1988年頃からで、1989年には川ぶちに植えてあるコマユミにも繭が目立って多かった。この年コマユミにあった繭をボール箱に入れて置いたところ、翌年の6月成虫がでていた。見るのが遅かったため既に固くなっていたが羽化したあとの繭にふたの残っているもの、ふたの落ちてしまっているもの、羽化時を思わせる蛹の脱殻の残っているものがあった。今までこのようなものを見たことがなかったので非常に珍しく感じた。その時撮影した写真のうち1枚が図6である。

このことに非常に興味を感じていた折、たまたまTTS昆虫図書で石井象次郎氏の「イラガのマユ